

# 研究者として 教育者として

## プロセスを楽しんで

作る、測る、解析する、考察して理論を構築するというサイクルを、すべて自分で回せるところが、大学の研究室で味わえる楽しさだと思います。誰も作ったことがないものを作るための手法の獲得には「生みの苦しみ」も伴いますが、獲得が困難であるほど、その後に得られる充実感は大きなものです。目的を達成するための方法を考えることは、社会に出ても必要な思考ですから、学生にとっても良い訓練になります。一方、大学における研究では、「論文なくして貢献なし」の心構えが必要だとも思っていますので、必ず論文にまとめることも意識させるようにしています。論文にまとめあげる力は、論理的思考力、文章表現力、および専門力をあわせた複合的能力であり、研究者として重要な能力のひとつだと考えています。このほかにも、研究に対する温故知新であったり、専門とは異なることでも素直に面白いと思える感受性、客観視すること、そして実践すること、などを意識して研究指導し、日々を駆けています。

## ベースを学んだ上で時流を知ること

情報ツールが発達したこともあり、時代の流れが早くなったように感じます。しかしながら、学術的な真理は変わりませんので、学生の皆さんには、このバランスをうまくとってもらいたいと思っています。ベースとなる学問をしっかり学んだ上で、時流を知り、それに流されるのではなく、どう取り込むかといったことを考えることが必要です。そのための機会を多く学生に提供したいと考え、情報提供や活動企画をしています。

私自身、基礎研究一筋だった大学院生時代から長いポストドク時代を経る間に、企業との共同研究を通して大学に「知」を求めている企業が多くあることを知りました。また、大学院教育改革のはしりでもあった文部科学省のプロジェクトの一環で、経営学修士(専門職)を取得するため早大ビジネススクールに通う中で、自分の研究者としての考え方や生き様自体が間違っていなかったことを再認識することもできました。産業界の素晴らしい人材との出会いがあり、社会への貢献を具体的にイメージすること、0→1の研究だけでなく1→100や1→1000にするような研究も重要だと思うようになりました。このような経験から、研究＝大学だけではなく、企業の研究者としての活躍も魅力的だと感じるようになり、学生にも経験を交えながら、キャリアデザインの考え方を伝えています。

## Every dog has his day

2012年度から2019年度までの7年間携わった本プログラムおよび先進理工学専攻の活動は、私の大学教員としてのキャリアにおいても非常に貴重な経験を得ることとなりました。イベント的な能力開発プログラムではなく、5年間じっくりと腰を据えた専攻の教育として、過去にトライアルで実施してきたことも含めて、博士人材教育に重要だと考えた教育内容をすべて注ぎ込んだ集大成となりました。また、教員の考えを押し付けるだけではなく、学生が何を学びたいと思っているのかなどニーズも共有するような気持ちで、多くの活動に取り組んできました。私の大学院生時代とは異なり、今の学生は考え方が非常に柔軟なこともあり、一緒にこのプログラムや専攻を良くしていこうと盛り上げてくれましたし、実際にプログラムを通して大きく成長してくれました。初期の立ち上げでコーディネーターを務められた西出宏之先生をはじめ、積極果敢なプログラム中核メンバー、事務局スタッフに支えられ、思いをぶつけることができました。この場を借りて、関わってくださったすべての方に、御礼申し上げます。

最後に、学生の皆さんには、恩師の受け売りですが“Every dog has his day”という言葉を送りたいと思います。ひたむきに努力していれば、日の当たる日が誰にでも必ずきます。頑張ってください。



朝日 透 教授

先進理工学研究科 先進理工学専攻/生命医科学専攻 教授。  
1991年早稲田大学大学院理工学研究科博士後期課程満期退学、翌年、博士(理学)取得。14年間のポストドクを経て、2007年早稲田大学生命医科学科教授。同年、経営学修士(専門職)取得。2009年ポストドクキャリアセンター長、2010年から博士キャリアセンター長を務める。